

## 見る 思う

「眼の会」代表

榊原 道真さん



## 視覚障害者と新しい生活様式

2月に入ってから、「新型コロナウイルス拡散防止」の言葉をよく耳にするようになってきました。それに伴い、視覚障害者の生活が大きく変化してきました。

例えば、自由に外出ができなくなりました。ガイドヘルパーの利用が制限され、従来通りの利用ができません。また、自分の依頼でガイドさんに感染させるかも、との思いで利用を控える方も多くいます。

私自身も、この制度を2003年度から利用していますが、5月度の利用時間数が初めて0時間となりました。自由に外出ができないのは、本当にストレスがたまります。

また、買い物などで店内の様子が分からなくなりました。レジ付近の環境が大きく変わったようです。見えない者にとっては、どうなっているのか全く分かりません。

レジに透明のカーテンのようなものがあり、お客さんと遮断しているようですが、触らないと分かりません。また、精算にはトレーを利用しているようですが、どこにトレーがあるのか、またそこから釣り銭を取るのも見えないとできません。

レジに並ぶ時、間隔を取るようには言われていますが、やはり見えないうとできません。その他、さまざまな店舗の出入り口付近に消毒液を置いていますが、これも見えないと分かりませんし、使用できません。

コロナ禍で新しい生活のルールが言われています。このルールは、視

覚障害者の従来の生活と相反したものとなっています。例えば、介助者（家族やガイドヘルパー）と外出する際には、密接となります。

離れていては安全に歩けません。物を確認するには、触らないと分かりません。触る際には、介助者に手を添えていただいて触ります。さまざまな状況説明も接近した距離で行います。これらも密接です。

このような行動は、災害時の避難所においても、全く知らない周囲の環境を理解するために必要な事です。「眼の会」では年に1、2回、サポート講習会を開催しています。困っている視覚障害者を見掛けた時、誘導等サポートしていただける方を増やそうとの思いで取り組んでいます。

兵庫県でも数年前から、みんなの声掛け運動を行っています。次第にサポーターの輪が広がっている中、コロナ禍の新ルールでサポートの声掛けが消極的になるのでは、と心配しています。

視覚障害者が困っている場面を見掛けた時には、新ルールに反するかもしれませんが、サポートの声掛け（何かお手伝いしましょうか？）を、お願いします。視覚障害者にとって、密接、触る事は生活上不可欠な事であると、ご理解ください。

コロナ禍以前の生活に、一日でも早く戻れますようにと願っています。そして、皆さま方に、今までより少しでも視覚障害者に関心をもっていただければうれしいです。

さかきばら・みちまさ 1953年生まれ。96年視覚障害者に。2009年、兵庫県内の視覚障害者らと「眼の会」設立。13年度よりユニバーサル社会づくり賞知事賞。鍼灸（しんきゅう）マッサージ師。防災士。